



キャンパス / 東京都町田市常盤町、東京都町田市本町田、東京都新宿区、東京都渋谷区、東京都多摩市、神奈川県相模原市
 学生数 / 10,361人 創立 / 1966年
 学群 / リベラルアーツ、芸術文化、ビジネスマネジメント、健康福祉、グローバル・コミュニケーション、航空・マネジメント、教育探究科学
 大学院 / 国際学術(グローバルコミュニケーション、老年学、大学アドミニストレーション、経営学、心理学、国際学術研究)
 経営 / 学校法人桜美林学園 設置校 / 桜美林高等学校、桜美林中学校、桜美林幼稚園

| | |
|------|--|
| ビジョン | 「Unique & Sharp」唯一無二の個性的な教育で、変革社会をリードする人材を育成 |
| 課題 | 迅速で柔軟な組織運営 / 主体的で躍動感ある教育研究 / 多様な価値観を尊重するコミュニティ |

重点施策 ワークスタイル改革

各組織の業務や事務量を把握、組織機能の棚卸しを実行し、不要な業務を削減し、適切な人員配置を行い組織を改革する。学園事務に必要な人材のスキルを定義して、教育、採用、配属を戦略的にを行い、骨太の経営体質へ。

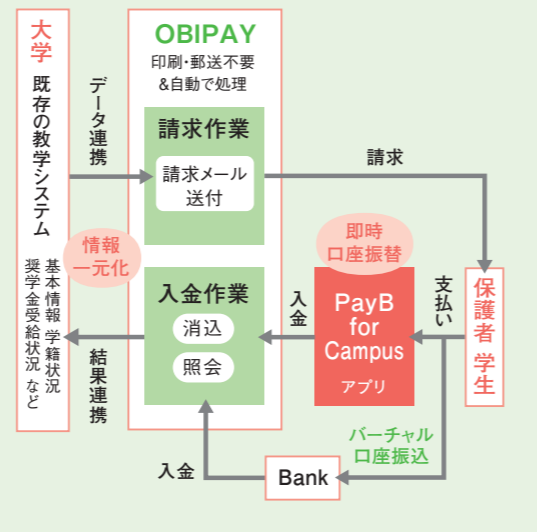
| 施策 | 概要 | 成果 |
|--------------------|--|---|
| ペーパーレス推進プロジェクト | 2018年開始。文書管理規程、文書別管理基準、文書電子化ガイドラインを制定し、保管すべき文書の選別や保管形態の選定、廃棄や電子化を進めた。無線LANやノートPCの導入など、紙を増やさないための環境も整備した。 | 既存文書削減量は目標の50%を超え、52.6%を達成。資料のコピー、印刷、送付等の手間、コストが減った。文書の電子化に伴ってオンライン会議がしやすくなり、コミュニケーションの活性化やフレキシブルな働き方も実現。 |
| 事務系基幹システム見直しプロジェクト | 2019年運用開始。新たなグループウェアの導入、学内システムの整備を行い、稟議や経費精算などのワークフローや、スケジュール管理方法を刷新。電子申請手続きや効率的なスケジュール管理、学外からのアクセスなどを可能にした。 | 定型的な事務処理が簡潔になり、意思決定や各種業務が大幅に迅速化した。手続きの電子化、保存書類のセキュリティ強化などによりペーパーレス化も促進され、オフィス空間が増加。ミーティングや学生対応に使える空間が増えた。 |
| 業務量の把握と改善 | 2019～2020年度実施。学園全部署を対象に、既存の業務の種類、業務量、業務時間等を調査。民間上場企業と比べた際の戦略業務の少なさ、オペレーション業務の多さ、専任職員のノンコア業務の多さなどがわかった。 | 経費精算システム導入、学生アルバイト勤怠管理のクラウド化、面接でのSlackの活用、チャットボット導入、Beacon(位置情報発信機能)出席アプリの開発などのシステム化を実施。戦略業務と学生対応に割く時間が増えた。 |
| One 桜美林 | 2022年開始。事務各部門の連携を強化する取り組み。クロスファンクショナル(部門横断的)なチームで議論するしくみの創設、部門連携による業務運用の効率化、多様な職員の相互協力による学園の価値創造などをめざす。 | 開始したばかりで、まだ顕著な成果は出ていないが、活動を通じて生み出されたたくみをISOマネジメントシステムに結び付け、組織運営の質を高めていく予定。学園全体としての一体感の醸成も期待される。 |

注目! 学費収納業務のシステム化でマンパワー削減 他大学にも共同利用を呼び掛ける

桜美林大学は、業務の効率化、収入源の多角化の一環として独自の学費収納システムを開発。2022年春から運用している。学費収納は、毎年発生する定型業務ながら、振込用紙の送付、振込人と学生の照合、不要な入金時の連絡など、人的、時間的負担が大きい。同大学は、コロナ禍を契機とした教育、学内事務のオンライン化の中で、この煩雑さの解消に乗り出した。

新たに開発した学費支払システム「OBIPAY」は既存の教学システムと連携して学生の情報を取得。学費を算出し、保護者・学生に請求メールを送信する。学生側がスマホアプリ「PayB for Campus」で決済すると、入金情報が大学に通知される。アプリを利用できない学生は、専用のバーチャル口座を使う。振込用紙の手配、教学システムへの支払い状況の反映、督促業務などが効率化され、職員の負担が飛躍的に軽減。他の業務に労力を割けるようになったという。この学費収納システムは多くの大学に適用可能で、利用校が多いほど使用単価を抑えられるため、同大学は共同利用参加校を募っている。

学費収納システム OBIPAYとPayB



*桜美林大学の学費収納システムの共同利用に関する問い合わせは、桜美林学園学納金収納システム共同利用推進プロジェクトまで
 メールアドレス: tuitionsystem-p@obirin.ac.jp

「可変性」の重視と、改革を生む「余白」の創出で Unique & Sharpな大学経営へ

CASE STUDY

桜美林大学

独自性を重視した改革により、30年間で急速に規模を拡大した桜美林大学。人口減をはじめとする社会変化に、しなやかな可変性と、発想を生む余白をもって臨む。



入学部部長、学長補佐
高原 幸治

たかはらこうじ ● 2008年桜美林大学大学院・大学アドミニストレーション研究科修了。大学卒業後、中学生や高校生を主な対象とした国際交流プログラム、海外留学を企画運営する会社に就職。2002年より学校法人桜美林学園に移り、入学部、国際交流、改組準備室、就職支援、学生支援などの部署を経て現職。

「Unique & Sharp」が、2021年に掲げた学園の長期ビジョンです。中国の貧民街での女子教育というユニークな出自を持つ本学は、近年もリベラルアーツ、学群制など、独自の施策をいち早く導入してきました。人口減が顕著に進むこれからは、さらに「10年早い」施策をどこよりも先に打つようなスピード感がないと、生き残れないでしょう。加えて、社会変化の激しい現代では、大学経営は「可変性」を重視すべきだと考えます。

例えば、コロナ禍を境に若者の関心が変化しました。本学の芸術文化学群では生で見る演劇から、映像表現技術を扱うビジュアル・アーツへと専修の人気のシフトが起きています。教育と教員の組織を分か

つ学群制は、こうした予測不能な変化に応じて、扱う学問分野や定員を変更しやすい利点があります。高大接続の要、探究学習支援プログラム「デイスカパー」も、生徒向け、高校向け、オンライン化、入試への活用と、ニーズを先取りする形で毎年ブラッシュアップさせています。今後は他大学と連携して理工系分野もカバーし、高校・大学が多数参加する高大接続のプラットフォームに育てます。

国内では小中高生が1人1台の情報端末で学び、アメリカではリベラルアーツからSTEM教育に力点が移り、チャットGPTも登場しました。一方で入試の選抜性は低下しつつあり、多様な学生が増えるでしょう。大学の学びも変わってしるべきです。唯一無二であるには、どんな学生にいかなる力をつける役割を担っていくのか、不断の見直しが必要です。

未来に向けて進める 効率化と財源の多角化

教学や入試の改革により、30年間に3千人だった生徒・学生数は、スケールメリットが出る1万2千人にまで増えました。一方で、規程や業務など管理系は小規模大学時代から抜け出せず、旧態依然のままでした。そこで、コロナ禍による入構制限を機に、業務のシステム化や慣習的な作業の廃止・外注化を進めたことで、労働時間にも心にも「余白」が生まれました。たとえ人口減に向けた打ち手があったとしても、目の前の事務作業に手いっぱいでは取り組みません。1人でも2人でも、この余白を持つ職員をつくるのが、改革の第一歩になるでしょう。入学部では、入試直前期の要項の印刷・学内配付のデジタル配信化など、事務仕事の効率化に地道に取り組んだ結果、本年4月、念願のIRチームを組織できました。

課題は財源の多角化です。経営上、財源の9割が学納金であることは大きなリスクです。これまでは議論で終わっていたこの課題に、事業担当理事を立て、挙手制の事業部会も設置して取り組んでいます。新たに開発した学費収納システムなどは、その一方策です。すぐに成果は出ないでしょう。しかし、理念や意志だけではどうにもならない時代はすぐそこです。本学も縮小フェーズに入らないとも限りません。その時になってから考え始めるのではなく、今からあらゆる手段を講じておくことが、教育機関としての責務ではないでしょうか。

取材・文 / 見山雄介